富士駅周辺ウォーカブル「金正寺の猫」プロジェクト　企画書（案）

富士健康印商店会

１．　目的

（１）「金正寺の猫」の逸話を題材にして、富士駅周辺に賑わいを創出。
歩きたくなる、滞在して楽しい街づくり。

（２）このプロジェクトを通して、各個店が自店の魅力を再確認、再発見するきっかけづくり。

２．逸話の概要

平垣にある金正寺に飼われていた猫が、近郷の猫を集めて、夜な夜な踊りの集会を開いていたというお話が伝えられています。

3．展開方法

「金正寺の猫」の逸話にちなんで、猫のイメージキャラクターやイメージグルメを開発。それらを使って、富士駅周辺への街歩きや再来街の機会を増やしていく。街のイベントなどでも活用できるようにする。

４．具体的な活動の例

※現段階での考えられる例です。詳細は検討していきます。

（１）イメージキャラクターづくり
猫をモチーフにしたイメージキャラクターを制作（選定）し、宣伝、イベントに活用。

（２）イメージグルメづくり
富士駅周辺の飲食店により「金正寺の猫」のイメージグルメを開発。
食べ歩きや、街に何度も足を向けたくなるような仕組みづくり。

（3）イベントの企画
イメージキャラクターを使ったスタンプラリーなど、街を歩いて各商店に立ち寄りたくなるような仕組みづくり。

（4）イメージ曲、ダンスなど制作
「金正寺の猫」の逸話を題材にしたイメージ曲やダンスなどを作り、イベントで活用。

５・課題

（１）プロジェクトの全体ストーリーやイメージを固める。富士駅周辺と「金正寺の猫」の話をつなげるストーリー作り。

（２）関係団体との連携、賛同者、協力者の募集。

（３）企画の PR 方法。ネット、SNS の活用。

参考：**【広報ふじ平成７年】富士の民話あれこれ**

金正寺の猫

いつごろのことか、はっきりとは、わかっていませが、、平垣にある金正寺（きんしょうじ）に飼われていた猫が、近郷の猫を集めて、夜な夜な踊りの集会を開いていたというお話が伝えられています。

今回は、金正寺の住職である加藤義忠さんから、お話を伺いました。

平垣の金正寺という古い寺に、年をとった大きな三毛猫がいました。片宿の百姓のおじいさんは、その猫がボスになり、毎晩、中島村の茅積場（かやつんば）で近郷の猫が集まって踊っているのをはっきり見たそうです。

ある晩おじいさんは、ふろ場の手ぬぐいに泥がついていて、かける場所も違っていることに気づきました。そこで、おじいさんは寝床へもぐって眠ったふりをしていると、真夜中になって飼い猫のタマが、手ぬぐいを口にくわえて出かけるではありませんか。おじいさんは、不思議に思ってタマの跡をそっとつけてみました。そうとは知らないタマは、片宿の家から畑を抜け、田んぼを通って中島村の茅積場まで来ました。

何と、そこには何十匹という猫が集まって、手ぬぐいを頭にかぶり、後ろ足で立って愉快そうに踊っていました。

すると、実然猫たちが一斉に踊りをやめて、一匹の大きな描を迎えました。手ぬぐいをいなせに結って、ゆうゆうとやって来たのは、金正寺の猫だったのです。

それから夜明けまで猫たちは楽しく踊ったということです。

＊茅積場・昔は農閑期の田畑にカヤを積んでいました。

加藤義忠さん （平垣） この話の続きで、「ある娩のこと、金正寺の猫は踊りの集会へ来るのが遅くなってしまいました。一匹の猫が理由を尋ねたら、『晩飯のおかゆが熱かったからだ』と答えました」という話もあります。

猫は「猫舌」だから、熱いおかゆを食べるのに時間がかかったんでしょうね。

現在、金正寺では猫を飼っていませんが、たまに近所の猫が、夜になると境内に集まっているようですよ。

中島地区は金正寺の北西にあたり、茅積場は中島天満宮の東方にあった。文字通り茅を積んでいた広場だったらしく、戦前は伝染病の隔離病棟が建ち、また大相撲の興行が行われたりしたらしい。猫たちは鷹岡や片宿など遠方からも集ったといい、主な猫に金正寺の三毛猫のほか、本市場常諦寺、柚木蓮盛寺の猫がいたそうだ。